様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １１ 日現在

機関番号：３４３１５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２３６９

研究課題名（和文）19世紀から21世紀アメリカ文学に見る書く行為と読む行為の相互作用に関する研究

研究課題名（英文）Studies on the reciprocal influences of the acts of reading and writing in American Literature from the 19th Century to the 21st Century

研究代表者
吉田　恭子（YOSHIDA, Kyoko）

立命館大学・文学部・教授

研究者番号：９０３３８２４４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究においては、19世紀から21世紀のアメリカ小説・文学史・文学教育における「精読」とはどのようなものなのか、またそれはどのように機能し、どのような役割を演じているのか、具体的な作品・作家研究、文学理論、教育理論、創作理論からアプローチをすることとなった。一見自律的なテクストも間テクスト性がゆえに詳細な読みが可能になるという前提のもとに議論を進めた。他のテクストに依存しながら、あたかもそうでないかのように意図的に精読を誘うテクストを「美学テクスト」と位置づけ、読者に働きかけることが目的の「政治テクスト」と区別し、前者が後者に依存する構造について今後研究成果をまとめることとなった。

研究成果の概要（英文）：In this research project, the research group approached the question of close reading--how it functions, what roles it plays in the American Literary Fictions from the 19th century to the 21st century, its literary history, and its pedagogy. The research group focused on actual literary texts, literary theories, reading skills pedagogy and creative writing pedagogy. Based on the premise that one can read literary text closely thanks to the intertextual network of mutual references and subtle differentiations, the research group defined two types of texts: aesthetic text and political text. The former strategically highlights its potentials for close-reading by differencing itself from and/or relying on other texts; the latter aims to bring some sort of impact to the world outside the text. The research group has tentatively concluded that the two types of texts are not mutually exclusive--all texts have some degrees of both characteristics.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：アメリカ文学　アメリカ小説　精読　間テクスト性　読解教育　翻訳　創作　文学理論

１．研究開始当初の背景
本研究の研究メンバーは、2011 年より「精読の再考」をテーマに据えた研究会を続け、その結果、今後、I. slow reading、II. 翻訳の役割、III. 教育の観点、以上 3 つの側面から、文学テクストを精緻に読む行為をめぐる諸問題を多角的に検討することで、19 世紀から 21 世紀のアメリカ文学に見られる「読む行為」、そしてそれを相互補完する「書く行為」に着目していくこととした。

２．研究の目的
本研究では、具体的な作品内で書く行為・読む行為がどのように表象されているか詳細に検討する一方、「精読」のイデオロギー・歴史性を批判的に検証するとともに、第二言語習得理論・翻訳理論・創作教授法を視野に入れつつ、「書き手の視点」で読む行為を理論的・具体的に論じることを目的とした。

３．研究の方法
（１）上記の問題意識を共有しながら、研究代表者・分担者が専門的に研究を重ねてきた時代・作家についてそれぞれ個別に研究を進めた。分担としては、吉田が戦後小説および創作教授法、中西が１９世紀とりわけホーソーン、島貫が２０世紀前半とりわけフォークナー、竹井が１９世紀末から２０世紀初頭とりわけジェイムズ、高野が１９世紀から２０世紀全般、とりわけヘミングウェイと文学理論、伊藤が２０世紀から２１世紀および読解教育を担当した。

（２）本研究はアメリカ文学研究における精読と呼ばれる制度への問題提起が根底にあるので、研究メンバーと立場を異にする研究者も含めて、国内外の研究者を講師として招き講演会・研究会を開催した。講師として招聘したのは、２０１５年度は京都大学文学部森慎一郎准教授、２０１６年度はフロリダガルフコースト大学杉森雅美助教、２０１７年度は立教大学舌津智之教授である。

（３）上の研究会とは別に、研究代表者と分担者のみで組織された研究会を２０１５年度は計４回、２０１６年度は計５回、２０１７年度は計３回実施した。個々の分担者が担当する作品や作家を扱うだけでなく、「研究目的」で詳述した問題点について意見を交換し、各自担当領域の方向性を検証し、進捗状況を確認しながら研究を進めた。

４．研究成果
研究の初期にインターテクス チュアリティ、文学作品のオリジナリティや剽窃の問題、翻訳と文学教育が主な論点として浮上した。一見自律的なテクストも間テクスト性がゆえに詳細な読みが可能になるという前提のもとに議論を進めた。他のテクストに依存しながら、あたかもそうでないかのように意図的に精読を誘うテクストを「美学テクスト」と位置づけ、読者に働きかけることが目的の「政治テクスト」と区別し、前者が後者に依存する構造について今後研究成果をまとめることとなった。以下、現時点での成果をまとめる。

テリー・イーグルトンは『詩をどう読むか』で批評理論を使う理論家が作品の精読を怠っているという思い込みに対して激しく反発している①。文学研究者にとって「精読」をしていないことは断罪に等しく、おそらくほとんどすべての文学研究者はみな自分は「精読」していると主張しているのではないだろうか。結局「精読」の誕生とともにアカデミックな文学研究が始まったのだから、文学研究に「精読」が前提になるのは当然のことであろう。

「精読」とは、そうでない読みを排除するためのなされたそもそも政治的でしかない区分なのである。したがってそもそもイデオロギー的に決定されるものであって「精読」という実体があるわけではない。むしろ「精読」を機能論的に定義づけることにはあまり意味はなく、イデオロギー的に何を排除しようとしているのかを見ることが必要なのである。

研究者が「精読」を誇示しなければならない必然性とは、特定のテクストが「細かく」「丁寧に」読む価値があると主張するだけではなく、自分たちが扱わないテクストをそうする価値がないと名指すためでもある。

「精読」行為においては読者に対して何らかの「効果」を及ぼすことを目的とするようなテクストよりも、自らのあり方の特異性に存在意義を求めるようなテクストの方が重視されることになる。パラディグマティックな言葉の選択とシンタグマティックな言葉の並びに意味があるとするテクストを「美学テクスト」とし、テクストの機能にのみ注意をはらい、なるべく多くの読者に働きかけることを目的とするテクストを「政治テクスト」とするならば、精読がそのふさわしい対象とするのは美学テクストの方であり、政治テクストはその対象からは排除される。むしろこの排除のメカニズムこそが「精読」の主要な目的であるとも考えられるだろう。当然のことながらテクストが一方的に美学テクストであったり政治テクストであったりすることはまれであり、多くの場合、その両極の間のどこかに位置しているが、「精読」はこの度合いを評価し、ふたつの種類に振り分けることを目的にしているのである。

第二次世界大戦以降、とりわけ冷戦期以降のアメリカ合衆国の文学研究においては、テクストのメッセージが一義的なものに還元で

きない、すなわち芸術作品として自律している、つまり外界への言及を必要としない、「イデオロギーが定まらない」特定のタイプのモダニズム文学こそが精読に値する「美学テクスト」として、研究対象となり文学教育のキャノンとされてきた。外界への言及がない、ということは、リアリズムの根拠となる「現実世界」およびにテクストが影響を与える読者の「感情」に文学テクストが依拠していないということであり、そのような文学テクストはほぼ無に等しいほど例外的であることは明白である。言い換えれば、それほど「現実」にこだわりながらもその自らの傾向に逆らってまで小説を「現実」から切り離さなければならないという強迫的な前提が働いている証左であり、こういった読みがいかにイデオロギー的であるかを暴露しているといえる。

またこの時期に「美学テクスト」の認定を受けることになったのは、フォークナーやヘミングウェイといったモダニズム作家とその直接の影響者であったジェイムズにとどまらない。たとえば 19 世紀半ばの小説においては、メルヴィルやホーソーンの作品が「美学テクスト」の側に、ファーンやオルコットの感傷小説やゴシック小説はその認定から外れることとなる。

モダニズム文学の戦略的な「美学化」は無数の他のテクスト、とりわけ先行するリアリズム文学との差異化においてなされてきた。その差異化こそがモダニズムの政治性ともいえる。モダニズムの作家たちは象徴的な下絵として古典テクストを利用するだけでなく、先行するテクストから自らを差異化するためにほかのテクストを参照し続けなければならない。ジェイムズ・ジョイスの『ユリシーズ』における文体パスティーシュはその典型である。無数に織りなされる間テクスト性の網の目に絡みとられるのを避け、ひたすら隣接テクストからの距離をとる行為は、モダニストたちを縛る制限であると同時に差異化の対象たるテクストがあることを前提としているという意味で明らかにほかのテクストに依存している。その無意識の政治性によって排除しようとする政治テクストがない限り、美学テクストはその美学性を主張することができないのである。

本研究では、この精読派の批評家たちの重視する美学テクストが、文学史的には一時的な現象であることを指摘してきた。美学テクスト自体が政治テクストの一部にすぎないことを具体的な作品研究を通して今後明らかにしていく。

＜引用文献＞

①テリー・イーグルトン『詩をどう読むか』川本皓嗣訳、岩波書店、２０１１年．４５４ページ．

②ジェイムズ・ジョイス『ユリシーズ』全四巻、高松雄一、丸谷才一、永川玲二訳、集英社文庫、２００３年．６８７ページ、７２５ページ、６６３ページ、６２０ページ．

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計８件）

① 島貫　香代子、Dark Houses and a Sanctuary: Joe Christmas’s Struggles with Home in Light in August、言語と文化、査読無、Vol. 21、2018、pp. 113-132.

②伊藤　聡子、文学テクスト使用の見直し、アカデミア　文学･語学編、査読無、Vol. 103、2018、pp. 221-240.

③吉田　恭子、ディスオリエンタリズム――偽アメリカ作家の告白、三田文学、査読無、Vol. 130、2017、pp. 48-57.

④竹井 智子、言語と身体の「奇妙な融合」――ヘンリー・ジェイムズ自伝における南北戦争を巡る語り、フォーラム、査読有、Vol. 22、2017、1–18.

⑤竹井 智子、ヘンリー・ジェイムズと記憶のかたち――「喪服のコーネリア」に穿たれた穴、英米文化、査読有、Vol. 47、2017、63-80.

⑥中西　佳世子、『七破風の屋敷』の噂する「群集」-呪いの予言と幸運な結末-、京都産業大学論集 人文科学系列、査読有、Vol. 50、2016、pp. 231-244.

⑦島貫　香代子、新しい時代の到来と幻滅――Go Down, Moses におけるバンガロー表象、アメリカ太平洋研究、査読無、Vol. 16、2016、42-57.

⑧高野　泰志、『夜はやさし』の欲望を読む、英文学研究、査読有、Vol. 92、2015、61-76.

〔学会発表〕（計 10 件）

①中西　佳世子、ラウンドテーブル:Money, Money, Money―19 世紀アメリカ作家の経済事情「ホーソーンの住居事情と創作―“Peter Goldthwaite's Treasure”を中心に」、日本ナサニエル・ホーソン協会関西支部８月例会、2017.

②竹井 智子、ラウンドテーブル:Money, Money, Money―19 世紀アメリカ作家の経済事情「Henry James の事情」、日本ナサニエル・ホーソン協会関西支部８月例会、2017.

③島貫　香代子、現実の中に事実を見出す――Sherwood Anderson and Other Famous Creolesにおける Faulknerのノンフィクション・パロディ、日本アメリカ文学会関西支部11月例会 、2017.

④高野　泰志、ジェイムズ、ヘミングウェイ、覗きの欲望、日本ヘミングウェイ協会第 28 回全国大会、2017.

⑤吉田　恭子、アメリカ文学の新学期―21 世紀アメリカ小説教授法、日本アメリカ文学会関西支部 10 月例会、2017.

⑥竹井 智子、ホーソーンとジェイムズ――独立戦争・南北戦争・第一次世界大戦――、日本ナサニエル・ホーソーン協会第 34 回全国大会シンポジウム、2015.

⑦高野　泰志、Jake Barnes の欲望の視線---不倫小説として読む The Sun Also Rises、日本アメリカ文学会全国大会、2015.

⑧中西　佳世子、『七破風の屋敷』の噂する「群集」―呪いの成就と呪いの解体―、日本アメリカ文学会関西支部 7 月例会、2015.

⑨Satoko ITO、Visualized Essay Writing: Putting the Blocks Together、The European Conference on Language Learning (ECLL) 、2015.

⑩Satoko ITO、Colors in writing: Making the most out of learning preferences、Ireland International Conference on Education、2015.

〔図書〕（計 3 件）
①高野　泰志、松籟社、下半身から読むアメリカ文学、2018、408.

②中西　佳世子、開文社出版、ホーソーンのプロヴィデンス―芸術思想と長編創作の技法―、2017、290.

③竹内 勝徳、高橋 勤、高野 泰志、大串 尚代、城戸 光世、古屋 耕平、舌津 智之、中村 善雄、小林 朋子、稲冨 百合子、新田 啓子、大島 由起子、村田 希己子、シアン・ンガイ、笠根 唯、彩流社、身体と情動―アフェクトで読むアメリカン・ルネサンス、2016、341(17-37).

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
吉田　恭子（YOSHIDA, Kyoko）
立命館大学・文学部・教授
研究者番号：９０３３８２４４

(2)研究分担者
中西　佳世子（NAKANISHI, Kayoko）
京都産業大学・文化学部・教授
研究者番号：１０５２４５１４

島貫　香代子（SHIMANUKI, Kayoko）
関西学院大学・商学部・准教授
研究者番号：３０７２４８９３

竹井　智子（TAKEI, Tokoko）
京都工芸繊維大学・基盤科学系・准教授
研究者番号：５０３４０８９９

高野　泰志（TAKANO, Yasushi）
九州大学・人文科学研究院・准教授
研究者番号：５０３４７１９２

伊藤　聡子（ITO, Satoko）
南山大学短期大学部・英語科・講師
研究者番号：５０４１１１７９

(3)連携研究者

(4)研究協力者
杉森　雅美（SUGIMORI, Masami）